

日本文化人類学会 2023 年度倫理委員会主催第 4 回特別シンポジウム

「文化人類学（者）の引き受ける責任とは/変化の可能性」

2023 年 4 月 8 日土曜日 13 時半より、オンラインシンポジウム

今なお続く、人類学と帝国主義との共犯関係

—琉球人骨問題に関する応答と、対等な人間同士の対話を求めた

琉球先住民族からの声

松島泰勝（龍谷大学経済学部教授）

matusima345@gmail.com

科学研究費・基盤研究 A（課題番号:20H00048）の研究報告の一部です。

草稿段階の原稿です。引用する際には著者からの許諾を得てください。

はじめに

本報告における「帝国主義」、「植民地主義/植民地主義者」はそれぞれ次のような意味となる。「他者の文化、人々、生活様式が植民地化された社会に浸透し、それを定義し、改変していく、外国権力の総体的なシステムである。帝国主義の機能や目的は、植民地の搾取にある」。「植民地のネイティブに対する搾取を強制する行為、イデオロギー、経済」[Trask(1999)p. 251]

本報告は、琉球に対する帝国主義と人類学者の共犯関係について、研究者による「墓荒らし」や「アイデンティティ搾取」に重点をおいて論じる。

1 継続する、琉球に対する帝国主義

1879年に日本政府に侵略、併合されて以降、琉球は現在まで日本の植民地である。琉球併合により、琉球は日本帝国の植民地となり、その住民は先住民族となった。日本の政府や研究者は、琉球人から遺骨・厨子甕、琉球諸語、土地、米国・仏国・オランダと琉球国との修好条約原本、琉球国政府の評定所文書等を奪った。

1972年の「日本復帰」の年、私は那覇市内の小学校で「方言札」の罰を受けた。琉球併合時から現代まで同化政策が実施されている。「日本復帰」は米軍統治の植民地から日本政府統治の植民地への移行でしかない。琉球併合に対して日本政府は謝罪や賠償をしていない。「南西有事」に向けて米軍基地、自衛隊基地が建設され、経済植民地主義が蔓延し、人類学者による文化収奪が継続している。

米軍基地建設に反対する目取真俊への大阪府機動隊による「土人」発言、沖縄県による人権条例策定過程において琉球民族も権利保護の対象にすべきとの要求の高まり等にみられるように、琉球人もヘイトクライムの対象になっている。日本全土面積の0.6%の沖縄県に在日米軍専用基地の70%を押し付け、米軍基地由来の様々な問題群を放置することは、日本政府、「日本人」による琉球人差別であり、帝国主義、植民地主義である。

現在、日本政府が琉球人を先住民族として認めないのは、「先住民族の権利に関する国連宣言」第30条（軍事活動の禁止）違反となり、「基地押し付け」という国策を実施できないからであると考えられる。日本政府が認知しようがしまいが、ILO 169号条約に基づき、琉球人は先住民族になり、「国連宣言」の適用対象となる。

私は、1996年に「国連先住民作業部会」、2011年に「国連脱植民地化特別委員会」、2020年と2022年に「国連先住民族の権利に関する専門家機構（EMRIP）」で報告し、世界の先住民族と交流して脱植民地化のための運動の輪を広げた。1996年から2022年まで約80人の琉球人が国連の各種委員会に参加し、報告した。その中には翁長雄志元知事、糸数恵子元参議院議員もいる。現在、「琉球弧の先住民族会」、「琉球先住民族まぶいぐみぬ会」、「ニライ・カナイぬ会」、「琉球民族独立総合研究学会」、「命どう宝！琉球の自己決定権の会」、「琉球独立共産党」、「沖縄国際人権法研究会」、ハワイの「御冠船歌舞団」などによる琉球先住民族

活動の拡大がみられる。その結果、2008年に「国連自由権規約委員会」、2018年に「国連人種差別撤廃委員会」、2022年に「国連自由権規約委員会」、2023年に「国連人権理事会」は、琉球人を先住民族として認めるよう日本政府に勧告した。

「国連宣言」の草案起草の場であった「国連先住民作業部会」に多くの琉球人が参加し、「先住民族の権利に関する特別報告者」、「先住民族問題に関する常設フォーラム」、「先住民族の権利に関する専門家機構(EMRIP)」などによる先住民族の権利回復のための国連システムが形成された。欧米各国でも「国連宣言」に基づき国内の先住民族に関する法律や政策が実施されてきた。2022年のEMRIPでも多くの先住民族は「国連宣言」を「我々の法律」と呼んでいた。

人類学者による琉球人遺骨盗掘問題は、琉球先住民族の尊厳や自己決定権を侵害する人権問題である。琉球人にとっての遺骨とは、骨神ふにしんであり、愛慕の対象であるとともに、先祖と確かな繋がり、先住権の土台となる。

2 人類学と日本帝国主義の共犯関係

琉球併合後、琉球人は差別の対象になった。その象徴的事件が、坪井正五郎らの人類学者が深く関与した「学術人類館事件」である。清野謙次、中山英司らは、大東亜共栄圏内における労働資源利用のために人類学を流用した。「日本人」に琉球人を同化するための仮説である「日琉同祖論」が人類学者により正当化された。日琉同祖論とは、琉球人が「日本人」「原倭人」「ヤポネシア人」であるとして、「縄文人の血の多さ」「突顎の頭蓋骨」「方言としての琉球諸語」「ミトコンドリアDNA」等から学術的に位置づけ、「日本人」に囲い込むための仮説である。それにより琉球が「日本固有の領土」であるとされ、「捨て石作戦」が行われ、戦後は、米軍基地を集中させてきた。

日本政府官僚、米軍人、自衛隊員、ヤマト開発業者・観光業者そして人類学者が琉球を収奪の対象にしてきた。

植民地支配下の不平等な関係性を利用して、人類学者により遺骨が盗骨され、研究が行われてきた。琉球人遺骨の返還を拒否している京都大学は現在もその帝国主義、植民地主義を清算していない。琉球人遺骨盗掘問題は、いまでも続く「人類学と帝国主義の共犯関係」を示している。

米国の植民地となったハワイでも研究者により遺骨が奪われ、その返還運動が展開されてきた。[Ayau(1991)]ハワイ大学ハワイアン研究センターの初代所長のハウナニ・ケイ・トラスクは次のように人類学者を批判している。

「ハワイの白人植民地主義において、遺骨の掘り起こしを決定するのは植民者である。我々は被植民者であり、植民者の骨を掘り起こす力を持っていない。よって、ネイティブの遺骨が掘り出され、研究される。宣教師や探検家の遺骨は神聖化される。(中略)ハワイアンにとって、人類学者一般(そして特にキーシング)は植民者集団の一部である。なぜなら

彼らは、我々が誰であり何であるのか、我々が政治的、文化的にどのように振る舞うべきなのかを規定する力を我々から奪おうとし続けているからである」[Trask(1991)p. 162]

「ハワイアンも、エジプト人のように、取り出され、研究され、そして博物館に運ばれる。(中略)我々は自分自身の歴史を作ることができない。他者が我々の歴史を捏ね上げるのを見ていただけである」[Trask(1991)p. 124]

「ハワイアンに関する人類学、考古学に関する全ての研究はやめるべきである。我々を研究し、掘り出し、切り刻み、押しつぶし、分析することは中止すべきである」[Trask(1999)p. 131]

「非ネイティブが我々の先祖を掘り起こし、その骨を打ち砕き、高速道路やホテルのために遺骨を移動させ、遺骨について論文を書くことは文化的に考えても間違っている。白人とは違い、我々は人骨の『科学的』研究に取り憑かれているわけではない。我々は先祖に多くの愛を感じており先祖の埋葬地は儀礼や敬意を払うべきものと考えている」[Trask(1999)p. 132]

日本でも、琉球人というネイティブの慣習、信仰、先祖への敬慕よりも人類学者による「研究」が優先され、人類学者が琉球人を定義することができるという体制が敷かれている。その前提には、人類学者の方が琉球の歴史や文化を詳しく知っており、琉球人は調査研究の訓練を受けておらず、その文化を理解することができないという認識がある。よって京都大学は琉球人遺骨を我々当事者に閲覧させない、返還しないと主張しているのである。

琉球人遺骨の盗掘と返還拒否の何が問題なのか。先祖と子孫を結ぶジェネアロジー (genealogy : 「大いなる血筋という記憶」) [Trask(1991)p. 118]の土台、証拠となる遺骨を奪うことで、先住民族性、先住権、土地権を消し去り、その植民地支配を強化し、固定化しようとする帝国主義の策動に大学や研究者が加担している。

京大は控訴審における準備書面において、原告の亀谷正子、玉城毅が第一尚氏の子孫とは言えないと述べている。琉球人は、家譜、厨子甕蓋の墨書などで先祖との関係や記憶を確認し、アイデンティティを形成してきた。琉球の「慣習法」を京大が否定し、遺骨保管のための占有権限を明示することなく「盗掘物」の研究を特権化している。先祖と自分との関係性、先祖の存在を通じて琉球の歴史や記憶や文化を継承し、アイデンティティを同定してルーツを自覚するという「民族意識」形成のプロセスを京大は否定している。京大は遺骨のゲノム解析や測定という研究によってのみ琉球人は「先祖」をもつことができると考えているのだろう。

この問題は、「骨神^{みにしん}」という琉球の神々も京大研究者により盗まれ、いまだに返還しないという「文化問題」でもある。研究者による墓荒らしにより、清明祭などの先祖祭祀という慣習の実施が阻害されている。これは琉球人の精神世界、信仰に対する「学問の暴力」であり、文化継承を妨害している。

京大に所属する人類学者は、なぜ大学による「学問の暴力」に対して「しらんぷりな一(他人事のような振る舞い)」をし続けるのか。遺族、先住民族、地域の人びとからすると、京

大人類学者は民族差別、植民地主義の「共犯者」である。これは形質人類学者だけの問題ではなく、琉球人遺骨の盗掘を問わず、謝罪せず、その返還を求めようとしない文化人類学者の姿勢が琉球人に対する差別構造を支えている。

京大の「過去や現在の過ち」に「しらんぷり」して、自分の「知的好奇心」を満たすために琉球からの収奪を継続するつもりなのだろうか。過去から蓄積された学知（先行研究）の上に現在の学知（研究）があり、京大の「権威」に胡座をかいて琉球人差別を続けることは許されない。

3. 現代琉球における「研究者による墓荒らし」問題

次の諸事例のように、「復帰」前後において土地や経済の収奪と、「研究者による墓荒らし」問題が同時並行的に発生した。

- ① 「最近、墓荒らしの被害がつづいているのは、宮古島、石垣島、久高島、西表島などの、いわゆる民俗学資料の宝庫といわれる島々（中略）およそ三年ばかり前から、本土の大学や民間の研究者が、沖縄の島々にどっと乗込んだ。珍しい生活様式、文化遺産は、一つ一つが貴重な研究資料になった。（中略）つい八月にも、沖縄民俗学の父といわれる故伊波普猷氏の浦添城跡にある墓があばかれる事件があったが、故伊波氏も最近のとんでもない民芸、民具ブームを嘆いておられることだろう。（中略）（伊波普猷の：松島注）お骨は草むらに捨てられツボが盗まれた」[『サンデーおきなわ』1971年]
- ② 「墓荒らしは無縁墓はもちろん、とくに旧家の古墓をあばき香炉や人骨を収めずしガメなど片ばしから盗み取るという悪質なもの。（中略）香炉一点、二百年前の花ビン二点、さらにずしガメ一点が盗まれ、カメに収められていた人骨はばらばらに放り出されていたという。（中略）付近の墓四、五カ所も同じ手口で荒らされており、（墓所有者の）翁長さんは『まったくひどいことをするものだ。いくらなんでも他人の墓をこじあけた上、骨を収めてあるカメまで盗むとは……。とても人間のやることとは思えない悪質な行為だ。絶対許せるものではない』とくちびるをふるわせていた。八重山署が捜査を進めている」[『琉球新報』1971年]
- ③ 「四百年も前に宮古を統一した仲宗根豊見親の墓と隣接する仲宗根家の一族を葬った門中墓（いずれも県重要文化財）が、今年二月から三月にかけて、また久松の松原ブサギ、池間島の島主の墓など、いずれも古いものがつぎつぎに荒らされ、多くの副葬品が盗まれているという。最近の傾向だと、この墓荒らしは平良市だけでなく、城辺町や下地町の来間島、伊良部村、多良間村など宮古全域にわたってひん発。新しいコンクリートの強固なものを除く古い墓という墓はかたっぱしから掘りかえされて被害にあっている。ネライはもちろん中にある副葬品とツボなどの焼き物、南方や中国渡来の古い物、地元独特の焼き物などが多く、ほとんどが島外に持ち出され、鹿児島県でも売りに出されているともいわれる」[『琉球新報』1974年]

- ④ 『島の民芸品や文化財は島に保存してこそ価値があるといえる。これらが学生や学者、商人の手に渡り島から姿を消していくのは惜しい』と城間団長（城間勇雄・沖縄大学沖縄学生文化協会与那国島調査団長）は顔をくもらせていた。民具は五、六年まえだと島の民家に数多くあった。ところが、本土の民芸家、学者、学生が「研究のため」ともらいうけ、持ち去るという。（中略）四百八十年前まえ、同島を治めた女傑サカイ・イソバの墓（字租内）には、五年前まであったカンザシ、陶器、まが玉など副葬品はことごとくうばわれているという。また、平家落武者の墓と伝えられる八島墓には、鞍（くら）、大刀、まが玉類があり文化財としても貴重なものだったが、本土の学者や民俗研究者が持ち去ったという」[『沖縄タイムス』1971年]
- ⑤ 「本年（1973年：松島注）1月中旬、保護委員平敷令治氏と私が宮古島およびその離島を調査したとき、畳一枚ほどの厚さ一〇 — 一五センチの巨石や、テーブル珊瑚が壊され、副葬品だけでなく人骨を放り出して『カメ』まで持ち去っている。（中略）三月中旬、同僚糸数専門員と玉城村の城跡パトロールの帰途、同村の舟越へ寄った。その時舟越の旧家の方から、最近舟越でもっとも古い墓を三カ所荒らされた。しかもその旧家は、一番奥の『カメ』と副葬品が盗まれていたという」[名嘉正八郎（1973）p. 114]
- ⑥ 「一九七二年八月に私が調査した時には、百按司墓には石厨子四個、家型陶製厨子七個、骨甕三十七個が確認できたが、一九七三年一月にそのほとんどが盗まれてしまった」[平敷令治(1990)p. 313]
- ⑦ 「石垣金星は沖縄島で教師をしていたが、『日本復帰』の頃、生まれ島である西表島の土地が開発業者により買収されている状況に居ても立ってもおられず島に戻って、『島おこし運動』を始めた。石垣金星によれば『島おこしとは、倒れ掛かった島を起こすこと』であるという。これまで島外の研究者が西表島を対象に研究調査をしてきたが、研究成果の地元への還元はほとんどなされなかった。石垣金星を中心に『西表をほりおこす会』が結成され、島人の足元にある歴史や文化を学び、学んだことを生活に活かす活動が始まった」[松島泰勝(2006)pp. 160-161]
- ⑧ 『『もっとはっきりしているのは、物を取って行くこと。墓荒らしが一番ひどかったけれども、学生や学者がきて、墓を荒して中にある物を取って行く。古い墓には、鎧や兜などの武士の装束があったけれども、それも、いつのまにかみんななくなっている。役所につとめている人が、あるグループの大きな手荷物を見て、これはあやしいとにらんだことがあった。職権で開けさせたら、案の定、つばなんかの盗んだ骨董品がぎっしり入っていた、ということも実際にあったわね』（安溪遊地(2008a)pp. 41-42)
- 『『あんたのつくった『西表島関係文献目録』（安溪、一九八六 a・一九八七）は、盗品リストとして使える。ほとんどの学者や物書きは調べていったきり、地元には音沙汰なしなんだから』[安溪遊地(2008b)p. 54]
- ⑨ 1854年、ペリー一行は琉球国から「護国寺の鐘」（1456年に尚泰久王が鑄造させた）を米国に持ち出し、アナポリス海軍兵学校が保管していた。1987年に喜舎場静夫氏が同鐘

を琉球に返還させた。米兵が持ち出した『おもろさうし（尚家本）』、「万国津梁の鐘」も、戦後、琉球人が返還させた。沖縄美ら島財団や沖縄県教育委員会は、2001年、琉球国王の王冠等の13点の「流出文化財」をFBI(米連邦捜査局)の「国際盗難美術ファイル」に登録させた。ペリー一行は2体分の琉球人遺骨も持ち出し、ペンシルベニア大学の博物館で「モートン・コレクション」の一部として保管されているが、その返還運動が在ハワイ琉球人やエドワード・ハレアロア・アヤウ氏、ニライ・カナイぬ会によって行われている。[NiraiKanai nu Kai(2023)、松島泰勝(2023)]

以上の事例から下記のように言うことができる。

- (a) 研究者による琉球における墓荒らしは、戦前に鳥居龍蔵、清野謙次、金関丈夫、三宅宗悦等だけが行った問題ではなく、「復帰」前後においても問題化していた。墓荒らしの犯人は形質人類学者だけでなく、厨子甕、副葬品等を研究対象にする他の研究者にもいた。2019年、本部町渡久地古墓群から石棺2個が盗掘され、2021年には伊計島の伊計グスクから遺骨が盗まれるなど、墓荒らしは現在も続いている。盗掘品の市場が形成され、その需要側に大学、博物館が存在し、琉球からの文化搾取が終わらない。
- (b) 盗掘品を「適正価格」で購入して展示し、研究することは、文化搾取を正当化するものである。嘘をついて「西表島の文化財」を持ち出す研究者に関して、石垣金星氏は「研究者は泥棒である」と語っていた。
- (c) 琉球の遺骨や「文化財」は米軍人によっても盗まれており、それらの返還運動が行政・民間によって行われている。ペンシルベニア大学では「モートン・コレクション」をめぐる、大学による植民地主義、人種差別について議論し、同大学のウェブサイトにおいて「Racism has no place in our Museum」「We reject scientific racism that was used to justify slavery and the unethical acquisition of the remains of enslaved people」「Actions towards repatriation and burial」「Our Ongoing Commitment to Ethical Practices & Repair」[PennMuseum “Morton Cranial Collection”]と明記し、大学の脱植民地化のための具体的な取り組みを進めている。

4. 琉球に対する国立民族学博物館の帝国主義

国立民族学博物館「標本資料目録データベース」で「沖縄」を入力すると1327件がヒットした。標本名「遺骨入れ容器」14件中、「厨子甕」（全て蓋付き）が11件、「骨壺」が3件であり、その全てが1975年に受け入れと記載されている。また「民族」分類項目には、他の「沖縄県」の標本と同じく「日本：Japan」と記載されている。アイヌの「民族」分類項目は「アイヌ：Ainu」と記載されている。[国立民族学博物館「標本資料目録データベース」]

以上の事実から下記のことが言える。

- ① 文化人類学者が琉球人を「日本民族」として分類、定義しており、これは「アイデンテ

ィティ搾取」の問題である。被植民者の「ウチナーンチュ」に対して「貴方はヤマトンチュである」と民族的属性を文化人類学の国家機関が決めつけることは政治的介入である。琉球民族としての民族的属性を否定して、「日本民族」に囲い込み、琉球の歴史や文化を他律的に決定しようとする帝国主義的研究手法である。「琉球先住民族否定」という日本政府の国策と符合しており、民博は国策の実施機関として機能していると言える。ILO169号条約のように、民族アイデンティティは他者によってではなく、民族自身の自覚に基づいて形成されるという国際的な了解がある。どのような文化人類学的研究に基づいて琉球人を「日本民族」として分類、定義したのかを説明する社会的責任がある。民族の定義を人類学者が決定できるとする学術的な根拠とは何か。なぜ琉球人を「Native」として考えないのか。

- ② 遺骨と厨子甕は一体化しており、それを切り離すことは琉球人に対する「学問の暴力」となる。例えば、厨子甕の蓋には、次のように死者に関する記憶、歴史が記載されている。「調べると若い女性骨と当歳位の小児骨とを合葬せるものである。骨質はやや脆いが、形は完全である。蓋の裏面には「道光三（1823年：松島注）、十一月、父比嘉」等の墨書が見える。骨を行囊に納めて進む。その祟りであろうか、これより雨はようやく激しく、山道は滑りがちでなかなかの難路となる」[金関丈夫(1978)p. 255]厨子甕蓋の墨書により遺骨の身元が確定される。厨子甕から切り離された遺骨は、誰で、いつ、どこで死亡したのかが分からなくなる。遺骨と厨子甕とは一体として琉球人の存在、記憶を次世代に引継ぎ、死後も祭祀を通じて先祖と子孫との相互扶助関係が継続されるという慣習や信仰が琉球では今も続いている。民博は厨子甕内の遺骨をどこに捨てたのか。それとも同遺骨は民博内の別所に保管されているのか。
- ③ 先祖の遺骨と切り離されることは琉球人のジェネアロジーが切断され、先住民族性が奪われることを意味する。また遺骨、厨子甕を琉球にある墓から引き離す行為は、土地から琉球人を切断することになる。つまり民博は、厨子甕を奪い、それをヤマトで展示することで、「琉球民族の抹殺」という所業をしているのである。琉球人は遺骨を通じた先祖との繋がりにより、先住民族の土地権を主張し、脱植民地化を進めることができる。「墓荒らし」から購入したものであるにせよ、厨子甕、骨壺は本来の場所つまり墓に返還すべきである。

まとめ

30年以上、カナカマオリ（ハワイ先住民族）の遺骨の返還運動をしているエドワード・ハレアロア・アヤウ氏は次のように述べている。「(人は死んでも：松島注) 骨のみが残り、それにより個人の永遠性が具象化される。骨は、先祖との繋がり、ネイティブハワイアン永遠の不死性を象徴している。骨は地中に置かれ、地球の一部となることで、永住の場所が確保される。骨は死者のマナを土地、島に伝える。その一帯すべてがマナで神聖な場所に

なる」[Ayau(1991)p. 247]

「人間性は常に死者の聖性を守ろうとする。このような人間性に基づく諸活動が自然に信仰になる」[Ibid., p. 261]

「ネイティブハワイアンには文化的、法的に先祖の墓や遺骨を大切に守る責任がある。先祖の骨を適切に取り扱うことは、ネイティブハワイアンにとって、主権問題に深く結びつく人権問題である。主権の土台となるのが、文化的、霊的に充実した状態で生きる権利である。ネイティブハワイアンのカスタムや信仰により、注意深く、尊厳をもった骨の取り扱いや、ハワイの土地への骨の返還が行われる。このような方法によってのみ、先に逝った人びとと今生きている人びととの生活の連続性が維持される。この連続性の維持によってのみ、人びとは土地と霊魂を取り戻すことができる」[Ibid., p. 263]

日本の大学や博物館の人類学者も、研究対象とされる琉球人と同じく「人間性」をもつ人間である。自分の親族の遺骨が墓から奪われたら、どれほど怒り、悲しむだろうか。「対話」を通して互いの「人間性」を確認し合い、琉球人の遺骨盗掘問題を「自分事」として考え、遺骨、マブイ（霊魂）、厨子甕等を元の墓に還して欲しい。

琉球人も奪われた先祖の遺骨を返還させることで、主権を回復することができる。人類学者は、他者の文化（特に神聖とされるモノ）を暴き、モノを盗み、植民地支配のための学術的正当化をおこなう植民地主義者という側面をもつ。墓荒らしによって得られた「戦利品」に基づく研究は、研究倫理上の問題がある。日本の植民地である琉球から持ち出された遺骨、厨子甕、副葬品等は「戦利品」となる。人類学研究の成果は、琉球人が今も苦しんでいる、植民地主義から派生する問題群の解決、その生活の改善、島々の平和、そして琉球人の権利や尊厳の向上、主権回復にどれほど貢献したのか。「知的好奇心」や「研究業績」のための収奪の場所ではなかったのではないか。

被植民者である琉球人を日本文化人類学会としてどのように認識し、研究倫理指針によって自らを律するのかが問われている。

参考資料

- ・安溪遊地「される側の声—聞き書き・調査地被害」宮本常一、安溪遊地『調査されるとい
う迷惑—フィールドに出る前に読んでおく本』みずのわ出版、2008年a
- ・安溪遊地「バカセなら毎年何十人もくるぞ」宮本常一、安溪遊地『調査されるとい
う迷惑—フィールドに出る前に読んでおく本』みずのわ出版、2008年b
- ・『沖縄タイムス』「“研究のため”と持ち去る 島人に警戒される学究徒」1971年9月3日
- ・金関丈夫『琉球民俗誌』法政大学出版局、1978年
- ・国立民族学博物館「標本資料目録データベース」
(<https://htqfs.minpaku.ac.jp/mocat/simple/search?query=%E6%B2%96%E7%B8%84&init>)

ial=true 2023年3月15日確認)

- ・『サンデーおきなわ』「横行する墓荒らし」1971年11月20日号
- ・名嘉正八郎「破壊される自然と文化財（上）」『青い海』1973年5月号
- ・平敷令治『沖縄の祭祀と信仰』第一書房、1990年
- ・松島泰勝『琉球の「自治」』藤原書店、2006年
- ・松島泰勝『琉球奪われた骨－遺骨に刻まされた植民地主義』岩波書店、2018年
- ・松島泰勝・木村朗編著『大学による盗骨－研究利用され続ける琉球人・アイヌ遺骨』耕文社、2019年
- ・松島泰勝『帝国の島－琉球・尖閣に対する植民地主義と闘う』明石書店、2020年
- ・松島泰勝・山内小夜子編著『京大よ、還せ－琉球人遺骨は訴える』耕文社、2020年
- ・松島泰勝『学知の帝国主義－琉球人遺骨問題から考える近代日本のアジア認識』明石書店2022年
- ・松島泰勝「ペリー持ち出し返還の流れ－日米大学保管の琉球人骨」『沖縄タイムス』2023年3月16日
- ・『琉球新報』「また墓荒らし出没八重山」1971年10月20日
- ・『琉球新報』「宮古で古い墳墓荒らし横行」1974年7月15日

- ・ Ayau, Edward Halealoha “Native Hawaiian Burial Rights” in Melody Kapilialoha Makenzie (ed.) *Native Hawaiian Rights Handbook*, Native Hawaiian Legal Corporation and Office of Hawaiian Affairs, 1991
- ・ Kawelu, Kathlleen L. *Kuleana and Commitment: Working toward a Collaborative Hawaiian Archaeology*, University of Hawai’ i Press, 2015
- ・ Kauanui, J. Kehaulani , *Hawaiian Blood—Colonialism and the Politics of Sovereignty and Indigeneity*, Duke University Press, 2008
- ・ Keesing, Roger M. “Creating the Past: Custom and Identity in the Contemporary Pacific” in *The Contemporary Pacific*, Volume. 1, Number 1&2, Spring&Fall, 1989
- ・ Linnekin, Jocelyn S. “Defining Tradition: Variations on the Hawaiian Identity” in *American Ethnologist* 10, 1983.
- ・ ----- “The Politics of Culture in the Pacific” in Jocelyn Linnekin and Lin Poyer (eds.) *Cultural Identity and Ethnicity in the Pacific*, University of Hawaii Press, 1990
- ・ Nirai Kanai nu Kai, *Messages from Nirai Kanai nu Kai Requesting the Return of Ancestral Remains from the Penn Museum*
(<https://www.youtube.com/watch?v=6ix0rJFUnJ4>, 2023年4月6日確認)
- ・ PennMuseum “Morton Cranial Collection” (<https://www.penn.museum/sites/morton/> 2023年3月31日確認)

- Trask, Haunani-Kay “Natives and Anthropologists: The Colonial Struggle” in *The Contemporary Pacific*, Vol. 3, Number 1, 1991
- -----*From a Native Daughter: Colonialism and Sovereignty in Hawai’i* (revised edition), University of Hawai’i Press, 1999